

特攻隊員・上原良司の人生から学ぶ

平和の尊さを忘れないで

松本第一高校生

松本市の松本第一高校伝統の平和教育集会が16日、同校であり、全校生徒600人余が太平洋戦争末期に22歳で戦死した池田町出身の特攻隊員上原良司(1922〜45年)の短すぎる人生とその死生観から、今の平和の尊さを学んだ。同校は、運営母体の外語学園を創立した安曇野市出身の政治家で戦争反対を唱え続けた植原悦二郎(1877〜11

スクリーンに映る上原良司の写真の前で、その短すぎる生涯、遺書に込めた思いを語る林さん(右上)。全校生徒が静かに聞き入った。いずれも松本市浅間温泉の松本第一高で

戦後80年
昭和100年

962年)の遺志を継ぎ、毎年、「平和」「憲法」「人権」の各テーマで全校集会を開催。平和希求の国際人育成を目指している。

戦後80年の今年の集会は、中信地区の高校教員や高校生らでつくる「わだつみのこえ80年の会」代表を務める塩野英雄校長(64)と、同校で教壇に立つ会事務局長の林直史さん(68)の講演を聴いた。

塩野校長は「身近に居た上原良司を通して県内の高校生に戦争と平和を改めて考えてもらいたい」と80年の会の意義を説明。林さんは知覧飛行場(鹿児島県)からの出撃前夜に上原が記した「所感」という名の遺書から「明日は自由主義者が一人この世から去って行きます」などの遺言を引き、「軍国主義国家にあって最後までその信念を貫き、人間性



戦争と平和の学習成果を発表する2、3年生

の尊重を最も大切にしたい」とと評価。「戦争は人の夢や人生を断ち切る最大の人権侵害であり、上原はその象徴的な存在だった」と持論を述べた。

会が8月に市内で開いた「わだつみのこえ戦後80年の集い」に参加した同校3年赤羽颯さん(18)ら2、3年生5人も、戦没者やシベリア抑留、満蒙開拓の犠牲者らをまつる県護国神社や松代大本営といった戦跡を巡り、学んだ成果を発表。「日本は被害国であり、捕虜虐待など加害国であることも忘れてはならない。その罪悪感と二度と戦争に参加してはならないという気持ちを持つてほしい」と全生徒に呼びかけた。集会で養った平和観を胸に2年生は12月、沖縄県へ研修旅行に向かう。

(逢沢哲明)

